

卓 話 ●松本 道彦会員

「なんかおかしい このくには」

前回の卓話では「ロータリー在籍 30 年を振り返って」と題して話しました。何をお話しするか考えていると三渡会員の卓話が思い起こされ、これを拝借するところか始めることにしました。



今年 1 月の三渡会員「かくまでに醜き国となりたれば捧げし人のただに惜しまる」と題した卓話はい

い内容で流石と感心しました。タイトルであるこの歌は、「昭和元年から半世紀にわたる昭和時代のさまざまな短歌を集めて取りまとめた『昭和万葉集』（集英社）という歌集に収録されている、ある戦争未亡人の歌だと渡部昇一著「本当のことがわかる昭和史」で知りました。その中の一節を紹介します。

「自分の父を、夫を、兄を『捧げた』親や妻や子供や弟妹も多かったのだ。だが、戦後日本は、日本の戦争は侵略戦争だったと断じ、国のために命を捧げた人々を『無駄死に』だと面罵して憚らない。しかもそうすることで GHQ に媚を売り、自らの地位を固めた人々が偉そうにふんぞり返っている醜悪な姿が随所にあった。これでは、まさに『捧げし人のただに惜しまる』という心境にならざるをえない。」

これを読んで思い浮かんだのが、三島由紀夫が自裁する前に産経新聞に寄せた「果たし得ていない約束」と題した次の文章です。

「私は此れからの日本に大して希望をつなぐことが出来ない。此のまま行つたら『日本』はなくなつてしまふのではないかといふ感を日ましに深くする。

日本はなくなって、其の代はりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、裕福な、抜け目がない、或る経済的大國が極東の一角に残るのであらふ。其れでも好いと思つてゐる人たちと、私は口をきく氣にも成れなくなつてゐるのである。」

2020 年は三島由紀夫没後 50 年になり、日本経済新聞の同年 10 月 21 日「三島由紀夫 50 年後の問い (2)『空っぽ』見抜いた目」と題した記事で社会学者宮台真司氏は次のように述べている。

「日本人は敗戦後、一夜にして民主主義者になつた。近年では一夜にして LGBT（性的少数者）主義者に、ダイバーシティ（多様性）主義者になつた。日本人は周りを見回して自分のポジションを保ちたがる、空っぽで入れ替え可能な存在だと三島は見抜いていた。」

もちろん、これは一社会学者の意見であり、多くの人があるように感じているとは思いませんが、上記の LGBT やダイバーシティのみならずジェンダーフリーなど欧米から入ってきた価値観が斯くも簡単に取り入れられる要素はいったい何なのか。「無機的な」「からっぽな」「ニュートラルな」「中間色の」「裕福な」「抜け目がない」三島由紀夫が指摘したこんな国に日本はなりつつあるのだろうか。

現在に目を転じると、新聞紙上を賑わしているのは政治家のパーティ券不記載問題だ。政治

資金規正法で収入は記載すべしと定められているのに記載していなかったという極めてお粗末な事件である。収入さえ記載しておれば、使い道に関しては一切関知しないといった代物であるからバック分は記載しなくてもいいと安易に解釈したのかもしれないが、法令遵守は政治家でなくとも必須条件だ。今回の法令違反は一応司直の手に委ねられ結論を見たのだから、国会で何を騒ぐことがあるのか。後は選挙で国民が断を下せばいいだけのことだ。であるにもかかわらず連日これほど重要な審議はないとの如く、与野党ともにまじめに議員を演じているのを見ると、国民を信用していないとの姿勢がありありと見える。国民に任せたたら問題議員がまた当選してくる、だから厳しい処罰を下し、問題議員の政治生命を断とうとしているようにも見受けられる。

また、マスコミの報道は処罰が手ぬるいとの、政治家は裏金の税金を納めなくてもいいのとか面白おかしく論じている。国民は怒っているとか、政治不信極まれりといった論調も少なくない。そのせいか、岸田首相は関係者の処罰を徐々に厳しくし、政治資金規正法も厳しくするとかいろいろおっしゃっている。派閥の集合体が自民党であり、そのトップが総裁なのだから、ご自身の処分なくして清和政策研究会、志帥会の幹部だけを諸悪の根源とみなすのは如何なものか、甚だ疑問に思う。

最も不思議に思うのは、巷間騒がれている政治家を選んだのは誰かということである。どの議員も間違いなく国民に選ばれた、いわゆる「選良」である。一般国民は正義の園に住んでおり、政治家は悪の園に住んでいるとでもいうのだろうか。かねがね感じていることだが、国民のレベル以上の政治家って存在するのだろうか。政治家だけが突出して道德観があり、人格見識が優れているなんてことはあり得ない。過去には「政治は最高の道德を行ふものでなければならぬ」と名言を吐いた浜口雄幸が居た。時代が生んだと言えれば言い過ぎであろうか。

我々の社会全体に蔓延している価値観というか雰囲気によって考え、行動するとするなら、それが三島由紀夫が言うところの「無機的な」「からっぽな」「ニュートラルな」「中間色の」国に陥っているとするなら、果たして政治家を責めることができるのであろうか。テレビを点けるとお笑いタレントが善良な国民面をして政治家を非難している。政治家を貶めればこの国が良くなるとは間違っても思っていないだろう。自分があの立場に立てば、同じように不記載をしている可能性は大いにある。元東京高検検事で弁護士の高井康之氏は「今回の不記載は、いわば運転免許証不携帯のようなものだ」と櫻井よしこ氏の「言論テレビ」で話されていた。国民の意見がいろいろあるのは当然で、「我々は日々物価高に苦しみ、厳しい生活を強いられているのに、政治家は好き勝手している」と憤りの声があることも承知している。政治家だって裕福そうに見えるが内情は見かけほど楽ではないと思う。庶民感情をいうのもいいが、政治家の実情を多少は理解することも必要なのではないか。

今回の事件に関して政治家だけにその責任を押し付けては何の解決にもならない。国民として政治にどう向き合うかが問われていることを肝に銘じることが肝要だ。

最後にサミュエル・スマイルズの名言で締めくくる。

「一国の政治というものは、国民を映し出す鏡にすぎません。」